



新企画 不定期連載
フレンティが聞く!

み え の ひ と び と



「男女共同参画」って特別なものだと思いませんか?そうではなくてみなさん知らず知らず実践していたり触れていたたりするものなのです。「実は身近なものなんだ」とみなさんに気づいてほしい「フレンティみえ」のフレンティが動き出しました!三重県に住む、三重県で働くひとびとにインタビュー、その人の「男女共同参画」を見つけ出します!

記念すべき1回目は、朝日新聞津総局 畑 宗太郎 記者にインタビュー!!



フレンティ: 畑さんは新聞記者ですが、普段はどんなお仕事されているんですか。

畑さん: 僕の場合は、三重県警や県庁の記者クラブで聞いた発表をもとに、実際に現場に出かけて取材します。大きな事件などは24時間つきっきりで取材します。事件現場に行ったり、近所の方や関係者にお話を聞いたりします。

フ: よくこの三重県総合文化センターにも来てくれますよね。それはどうして?

畑: 新人記者はみんなやりますが、署回りというのがありまして、いくつかの警察署を毎日回って話題がないか探すんです。そういう感覚で「記事ないですか?」とお邪魔してます、総文さんはネタの宝庫なので(笑)。いろいろな場所へお邪魔することで、多くの方と知り合うことができます。

フ: 本当にそれは“足で稼ぐ”ですね!

畑: 発表だけを記事にしても読んでくださる方々も書いている方も面白くないと思いますし。「どこで見つけたの?」というような話を拾っていくのが楽しい。それから「これは問題だ」と感じた時にも記事にします。こういうときに取材対象を紹介してもらえる人脈を大切にしています。

フ: お仕事のタイムスケジュールは?

畑: 取材対象者にお話を聞くときは、その方に合わせて昼夜問わず会いに行きます。記事はほとんど夜書きます。夜遅いので普通のお仕事よりは朝はゆっくりかもしれません(笑)。

フ: 記事を書くのにどれくらい時間がかかりますか。

畑: 1行1分と言われていて、今新聞は12文字で1行です。一番短い記事で15行、インタビューだと80~100行ですから、インタビューだと80分くらいが目安と言われていますが、原稿として仕上げるには結局、それ以上かかっていると思います。校正はデスクにもらって、見出しは編集さんがつけてくれます。

フ: 見出しは記者さんが書いてるんじゃないんですか?! フレンティびっくり!!



畑: もちろん見出しから記事の内容が伝わりにくい場合は、変更をお願いすることもあります。逆に記者本人が見出しをつけると、熱を込めるところが違ったりして、読者の皆さんにわかりにくい場合もあります。客観性が大事ですね。

フ: 記者さんって忙しいイメージがあるのだけど、お休みは?

畑: シフト勤務で週休2日制です。想像されるよりお休みをもらっていると思います。

フ: え、そうなんですか? 記者さんがいなくて記事が足りなくなることはないんですか?

畑: 原稿が競合することがよくあるので、記事が足りないことはないんです。ただ取材したい対象があるとお休みでも行っちゃいますね。三重県にいる間に三重県のことを知りたいという気持ちもあります。

フ: 労働時間長いですよね…。

畑: ずっとデスクに座っている仕事とは違って、ずっと根を詰めてやっているわけではないです。待ち時間が長かったりはしますが、そういうときは電話取材したり記事を書いたり、本を読んだりしています。時間の使い方がうまくなると仕事ができると言われます。警察担当で事件を扱っている時は、昼寝をする記者は良い記者だと言われることすらあって、朝と夜動くと取材がやりやすいからいい記事が書けると(笑)。

フ: 拘束時間は長いかもしれないけど、時間の使い方が自由ですね。自由業みたい。

畑: そうですね。新聞記者は世の中で起こっていることなんでも知っておいた方が良いので、本を読むことも映画やテレビを見ることもなんでも無駄なことはありません。時間を上手に使うことを考えています。

フ: いろいろなところにアンテナをはっているんですね。

畑: みなさん新聞を読むより、テレビや芸術・文化に触れる方が多いじゃないですか。テレビを見て、「この切り口は参考にしたい」とか「この問題は取材したい」と思うこともあります。バラエティはみんなと笑いのツボが違うこともありますけど(笑)

フ: お休みや待ち時間に知識の吸収をして、それを仕事に還元する。まさにワーク・ライフ・バランス(※1)じゃないですか! 長期休みも取れるんですか?

畑: 取れますよ。ただ大きい事件とかあると消えますけど(笑)。過度な期待をせずに旅行など申し込みます。休みも担当の仕事によって不平等にならないよう、上司が調整してくれます。またちゃんとお休み

を取るようと会社も言ってくれますし。

フ: へえ～。ちょっとイメージと違う。畑さんにはロールモデルはみえますか。

畑: はい、います。とてもいい方だしイクメン(※2)なんです。早く仕事を切り上げてお子さんにごはんを食べさせたりと育児もされてます。最近はスマートフォンなどでも原稿の確認ができるので、こういった働き方も可能です。まあ24時間縛られているということにもなりますが(笑)。

フ: ここで少し話を変えて、仕事やプライベートで見た“男女共同参画(※3)”をききたいんですけど。

畑: そうですね、僕はフレンテみえの取り組みは注目していて、男性の家事講座や避難所の講座、離婚講座とか話を聞いていくと、女性の問題、男性の問題、避難所の問題と結局全部つながっていて、ユニバーサルというか、突き詰めていくと弱者や困難を抱えた人の立場に立って考えることにつながると感じています。性別とかいろいろな問題を超えていくところに惹かれます。簡単に言うと優しい社会でしようか。一歩立ち止まってその人たちにとって生きやすい社会のことを考えます。

学生のころは日本に住む外国人への支援をしたりしました。記者になってからは、名古屋での事件を担当してから児童虐待に注目しています。生活の不安定さが要因なのか、最初から子どもが憎いわけではないと思うのですが…ここが男女共同参画の出発点かもしれないですね。DV(※4)もそうですよね。

僕自身の母親は家庭に入って社会とつながりが持てない時期があり、そんな母を見てきたので男女共同参画は自然に感じていたのかもしれませんが。子どものころは、母から妹と一緒に家事を教わりましたし、父もお弁当作ってくれたりとか、そういうことが普通の家庭でしたね。

フ: そういえばスリランカに行かれたとか。

畑: とてもいいところでした。スリランカでは仏教、イスラム教、キリスト教など、それぞれがいろいろな宗教を信仰していて多様性を感じました。教会の50m先にモスクがあったりと、それぞれが尊重し、当たり前存在していました。現地の人とお話したり、結婚式にも遭遇しました。スリランカも日本と同様新郎の家に新婦がお嫁に入る、という感覚のようです。僕はファーストバイトをはじめ、結婚式はジェンダー意識が表れる最たるものだと思っています。僕が結婚式をやるとしたら、新婦が先に入場して僕が母親と入っていく…それをやってくれる人と結婚したいです。

フ: 畑さん、おもしろい！是非やってください！旅の話に戻しますが…

畑: 日本にいたら絶対会えない方と会えるのが魅力です。そのまま生活していると価値観が狭くなってくると感じて、自分はある程度の期間でリセットしたい。無理してでも一歩前を出てクリアになることが自分には必要なんです。旅先では多様な視点を感じられます。

今回の旅では、普段いかにスマホに頼って生活しているのかという気づきがありました。

フ: 今日はいろいろなお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

畑: こちらこそありがとうございました。

※1 ワークライフバランスとは、自身の私生活を充実させることで、そこで得た知識や経験を仕事にも生かし、その効率を上げる相乗効果のあるサイクルのことを指します。ワーク・ライフ・バランスと聞くと、仕事も私生活も同じだけ頑張らないといけない、と取られがちですが、そうではなく、その時々でその人に合ったライフスタイルで暮らすことが大切なのです。

※2 イクメンとは、子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のこと。または、将来そんな人生を送ろうと考えている男性のこと。子どもたちの可能性が、家族のあり方が大きく変わっていくはず。そして社会全体も、もっと豊かに成長していくはずです。(参考:厚生労働省 イクメンプロジェクト HP より)

※3 男女共同参画(男女共同参画社会)とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」です。(男女共同参画社会基本法第2条)

※4 DVとは、「ドメスティック・バイオレンス」とは英語の「domestic violence」をカタカナで表記したものです。一般的には「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振るわれる暴力」という意味で使用されることが多いようです。ただ、人によっては、親子間の暴力などまで含めた意味で使っている場合もあります。内閣府では、人によって異なった意味に受け取られるおそれがある「ドメスティック・バイオレンス(DV)」という言葉は正式には使わず、「配偶者からの暴力」という言葉を使っています。(参考:内閣府男女共同参画局 HP より)

お楽しみいただけましたか？私生活(ライフ)が仕事(ワーク)と循環している、これぞ無理のないワーク・ライフ・バランスだと感じました。さあ、次はだれにインタビューしようかな～。ご期待ください(不定期ですけど…)